

達成動機への態度と ボランティア活動の動機

伊藤 忠 弘

勉強や仕事など何かを成し遂げようと努力している人に対して、「誰のために努力しているのか」と問えば、多くの場合「自分のために」という答えが返ってくるだろう。他の誰でもない「自分のために」に達成に向けて努力することが望ましいとする風潮は、自己決定理論の生まれたアメリカに限らず今や日本においても広く認められる。実際、自分自身が決めた目標に自らの意思で課題に取り組んでいる方が、持続性も高く、質の高いパフォーマンスがもたらされることが指摘される（鹿毛，2012）。

では、ボランティア活動はどうだろうか。実際にボランティア活動を行っている人に「誰のためにボランティアをしているのか」と問えば、その活動が向けられる「困っている人のために」という答えが返ってくるだろう。何の見返りも期待せず（無償性）、自らの意思で（自発性）、直接自分とは関係のない見ず知らずの人に対して（公共性）、支援を行う活動を「ボランティア」と定義するならばそれも当然である。

しかし現実にはボランティア活動を行う動機は多岐にわたる。伊藤（2011）はボランティア活動の動機を測定するために作成された尺度の因子分析結果をレビューして、10個の動機に整理している。例えば「他者のため」という利他的動機であっても、「困っている人のため」という「利他心」による動機以外に、社会的な責任や義務の感覚に基づく動機が抽出されている。また利己的と考えられる動機のなかにも、知識習得や経

験、自己成長、自尊心の高揚、否定的な感情の解消など、質的に異なる様々な動機が存在が指摘されている。

一方、達成行動においても「周りの人のため」という動機が存在が語られることがある。周囲の他者が動機づけに果たす重要な役割を強調する他者志向的達成動機は、「自分を応援してくれる人の期待に応えるため」や「自分を支えてくれた人に恩返しをするため」という意識をもって努力を続ける動機づけのあり方を指す。先のロンドンオリンピックで活躍した日本選手のコメントのなかにしばしば「恩返し」や「感謝」という言葉が聞かれたが、もしそれが動機づけの源泉となりうるならば、他者志向的達成動機を反映していると言えるだろう。

達成動機づけの志向性とボランティア活動の動機の類似性

達成行動とボランティア活動という2つの異なる行動は、「自分のため」かそれとも「他者のため」かという意識から動機（理由）を捉えると、いくつかの共通点を指摘することができる。

第一に、両者とも一人の個人のなかで、「自分のため」という動機と「他者のため」という動機が対立し、葛藤している状態が存在しうる。受験勉強を例にとると、自分が目指したい進路と親が自分に対して期待する進路が異なっているような場合、「何（誰）のために勉強しているのか」という疑問がにわかに浮かび上がってくる。このような状況は「自分のため」と「親のため」が葛藤していると捉えることができる。一方、ボランティア活動では、謝礼を受け取ることによってボランティア活動を続けることに困難を感じる場合があることが指摘されている（小澤、1998）。この状況でも「何（誰）のためにこの活動を行っているのか」という疑問がボランティア個人に浮かび上がってくる。ボランティア活動の無償性にこだわると、「自分（金銭）のため」と「困っている人のため」という2つの動機が対立するため、金銭的報酬が与えられることによって逆に「困っ

ている人のため」という活動の利他的な意味づけが損なわれると考えられる。

第二に、行動を続けていくなかで、一人の個人のなかで達成行動やボランティア活動を行う動機が変化する。達成行動では、自分が自律的に取り組んでいた勉強やスポーツなどに対して、周囲の人が応援してくれたり期待してくれたりするときに「周りの人のためにも頑張りたい」という意識が生じたり、逆に周囲の人の期待が強くプレッシャーを感じるようになると、「自分のため」に努力することが重視されたり、そのように意識を変えたりすることが予想される。ボランティア活動でも、活動を継続していくなかで、例えば「困っている人を助けたい」という動機で始めた人が、活動が自分に与える影響の大きさに気づき、「自分のため」という意識を強くしたり、逆に経験や知識を得るためにボランティア活動を始めた人が、対象者とふれ合ったり感謝を伝えられたりするなかで「困っている人のため」という意識を強くしたりすることが報告されている（伊藤，2011）。

第三に、達成行動とボランティア活動のどちらにおいても、「自分のため」と「他者のため」という動機の関係づけ方が、状況ないし人によって異なると考えられる。先述したように2つの動機を二項対立的に捉えると、どちらかの動機が強く意識されるともう一方は割引かざるを得ない。そのような意識の違いによる個人差も確かに存在している。しかし「自分のため」と「他者のため」という動機が常に葛藤しているわけではないし、二項対立的に捉えていない人もいる。自分の目標に努力し達成することが結果的に周りの人の期待に応えることになっている達成状況や、困っている人を支援する活動のなかで受け取る感謝の言葉や笑顔が自分の喜びや励みになるようなボランティア活動は、むしろ2つの動機が接近し統合されている状況と考えられる。

伊藤（2004）は達成行動における「自分のため」と「周りの人のため」という2つの動機の関係づけ方を測定する尺度を作成した。「自分のため」という意識に支えられる達成動機づけを自己志向的動機、「周りの人のた

め」という意識に支えられる達成動機づけを他者志向的動機として、両者に対する態度からその関係づけのあり方に迫っている。因子分析を行ったこれまでの研究の結果から、(1) 自己志向的動機を望ましいとする態度、(2) 他者志向的動機を望ましいとする態度、(3) 他者志向的動機に伴うプレッシャーや罪悪感など否定的な側面の認知、(4) 他者志向的動機は最終的には自己志向的動機に還元されるという態度、(5) 自己志向的動機と他者志向的動機が区別されず、統合されているとする態度、の5つの態度が共通して抽出されることが明らかにされた。

本研究では、この自己・他者志向的達成動機に対する態度とボランティア活動に対する動機の関係について検討する。後述するように、今回の研究の研究参加者は一般大学生であり、ボランティア活動に関与していない者が多いため、実際に行っているボランティア活動の動機（理由）ではなく、ボランティア活動を行っている人の動機（理由）の認知との関連を調べることになる。両者の関係について期待される結果として、以下の3つの仮説を挙げる。

① 他者志向的動機に肯定的な態度を保持している人は、他者の期待や要求に対して敏感であると予想されるため、ボランティア活動に対しても積極的で利他的な動機を保持しやすいと考えられる。このような人は他者のボランティア活動に対しても利他的な動機を推測しやすいと考えられる。

② 自己志向的動機に肯定的な態度を保持している人、あるいは他者志向的動機を自己志向的動機に還元して捉えている人は、自己決定や行動の自分に対する意味づけを重視するため、ボランティア活動に対しても利己的な機能を重視しやすいと考えられる。このような人は他者のボランティア活動に対しても利己的な動機を推測しやすいと考えられる。

③ 達成行動について自己志向的達成動機と他者志向的達成動機の双方を統合させて捉えている人は、ボランティア活動についても他者の利益だけでなくボランティア活動によってもたらされる自分への肯定的な影響について意識しやすいと考えられる。このような人は他者のボランティア活

動に対しても利他的な動機と共に実利的な動機を推測しやすいと考えられる。

研究 1

目的

自由記述によって収集されたボランティア活動をする動機（理由）の推測と自己・他者志向的達成動機に対する態度の関係を調べる。

方法

研究参加者 ボランティア活動に関する授業を受講している大学生 110 名¹⁾。

手続き 2010 年 11 月 2 日から 11 月 16 日まで著者が行った 3 週にわたる授業の一部を用いて調査を実施した。

第 1 週目では授業の冒頭で、「人はなぜボランティア活動をするのか」を受講者に問い、各人がその動機（理由）と考えるものを 3 つまで自由に記述するように求めた。なお事前に、上記の記述は学籍番号と氏名を記入の上、回収することを教示した。

また第 2 週目では、授業時間の一部を用いて 72 項目からなる自己・他者志向的達成動機への態度尺度（伊藤，2004；以下、動機態度尺度）を「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」の 6 件法で回答させた。この回答も学籍番号の記入を求めると共に、回答は強制ではないことを教示した。

結果

ボランティア活動の動機（理由）の分析 第 1 週目の調査で参加者が 3 つずつ挙げた動機（理由）を分類した。分類のカテゴリーとしては、伊藤（2011）が質問紙の下位尺度（因子）に基づいてボランティア活動の動機

1) 3 週の授業のうち一度でも出席し、授業中の調査（レポート）もしくは質問紙の回答を提出した人数である。研究 2 も同様である。

表1 ボランティア活動の動機（理由）分類のカテゴリーと人数

カテゴリー	人数
1 他者を助けるため	54
2 責任、義務、社会貢献	24
3 人間関係の広がり、他者との関係に基づく理由	16
4 自分の存在確認、充実感を得るため	23
5 知識を増やす、新たな経験をするため	4
6 将来のキャリアに役立つため	4
7 自分を成長させるため	12
8 自己満足のため、優越感を得るため	26
9 自分探し、罪悪感を解消するため	9
10 物質的利益	0
11 互惠性、自分が助けてもらった、相手の立場なら助けてほしい	17
12 共感的喜び、相手が喜んでくれることがうれしい	8
13 学校などで強制的に参加させられた	5
14 時間や労力を有効に活用するため	5
その他	17

注1) 1～10は伊藤（2011）に基づく；11～14は新たに作成

注2) 一人の記述内容が重複し、同じカテゴリーに含まれた場合は「1名」とカウントした

を分類した10個のカテゴリーをベースとした。さらにこのカテゴリー以外に複数の参加者が挙げた理由を含めるために新たに4つのカテゴリーを加え、計14個のカテゴリーを採用し、239個（80名分、1名は2個のみ記述）の記述を分類した（表1）。

「他者を助けるため」といった利他心に基づく動機が圧倒的に多かったが、さらに「社会を良くする」といった社会における義務や責任、互惠性に基づく理由を含めると、利他的な動機はほとんどの参加者が1つ以上を挙げていた。充実感や達成感を得たり自分の存在価値を確認するためといった動機や自己満足のためといった動機も多く挙げられていた。

自己・他者志向的達成動機への態度尺度の分析 伊藤ら（2012）は先行研究に基づいて、(1) 自己志向的動機に対する肯定的態度（以下、自己志向）、(2) 他者志向的動機に対する肯定的態度（以下、他者志向）、(3) 他者志向的動機に対する否定的認知（以下、他者否定）、(4) 他者志向的動

機の自己志向的動機への還元（以下、還元）、(5) 自己志向的動機と他者志向的動機の統合（以下、統合）の5つの下位尺度（各5項目ずつ）から成る25項目の尺度を用いている。今回の分析では、72項目の尺度からこの25項目に対応する項目の回答のみを用いて下位尺度得点を算出した（表2）。

表2 動機態度尺度の下位尺度の基礎統計量

	研究1 (N=104)		研究2 (N=134)	
	M	SD	M	SD
自己志向	18.9	4.3	18.2	4.6
他者志向	16.0	4.5	16.7	4.6
他者否定	20.6	3.8	19.6	4.0
還元	21.2	4.9	20.3	3.6
統合	23.5	3.3	23.4	3.8

ボランティアの動機と自己・他者志向的達成動機への態度の関係 ボランティア活動の動機（理由）として、利他的動機、実利的動機、利己的動機のいずれに注目したかに基づいて参加者を分類して、5つの下位尺度得点を比較した。

まず14個のボランティア活動の動機（理由）を、(1) 利他的動機（カテゴリー1、2、11、12）、(2) 実利的カテゴリー（3～7と14）、(3) 利己的動機（8～10と13）の3つの大きなカテゴリーにまとめた。その際、14個のカテゴリーに分類できなかった「その他」に含まれた記述も、その内容に従って上記の3つのカテゴリーに分類した。その結果、一人の参加者が挙げた理由（動機）の組合せとその人数は表3のようになった。

この3カテゴリーの組合せに基づいて、ボランティア活動の動機を利他的と捉えるか利己的と捉えるか、その捉え方の異なる3つのグループに参加者を分けた。具体的には、表3のグループ1と2を「利他的動機認知群」（25名）、グループ3と4を「中間群」（28名）、グループ5～8を「利己的動機認知群」（26名）とした。

この3群で5つの下位尺度得点に差異があるかどうかを確認するため、

表3 大カテゴリーに含まれる理由の数と人数

グループ	大カテゴリー			人数
	利他的動機	実利的動機	利己的動機	
1	3	0	0	11
2	2	1	0	14
3	2	0	1	10
4	1	2	0	18
5	1	1	1	11
6	1	0	2	7
7	0	2	1	6
8	0	1	2	2

1要因3水準の分散分析を行った結果、いずれも有意な主効果は得られなかったが、自己志向 ($F(2, 70) = 2.09, p = .13$) と還元 ($F(2, 69) = 1.72, p = .19$) では、利己的動機認知群が最も得点が高いという傾向が認められた(表4)。

表4 ボランティア動機の認知と自己・他者達成動機づけへの態度

	自己志向	他者志向	他者否定	還元	統合
利他的動機認知群	18.4 3.9	16.8 4.9	20.7 3.9	20.1 4.4	23.0 3.3
中間群	17.8 4.9	16.6 5.0	20.6 4.2	20.9 5.1	23.7 3.5
利己的動機認知群	20.3 4.4	14.8 4.4	20.8 3.5	22.6 4.4	24.2 2.9

上が平均値、下が標準偏差

考察

ボランティア活動の動機(理由)の認知と自己・他者志向的達成動機への態度が関係があるかどうか検討をした。その結果、統計的な有意には至らなかったものの、ボランティア活動の動機を利己的に捉えている者が、達成動機づけに対しても「自分のため」に従事することが望ましいと考え、

また「周りの人のため」にと従事している達成行動も結局は「自分のため」にやっていると還元させて考える傾向が認められた。これは仮説と合致する方向であった。また平均値を見る限り、利己的に動機を捉える群は他者志向的動機への肯定的な態度が認められにくい。一方、自己・他者志向的動機を統合させる捉え方については、今回の3つのグループでは仮説で予想したような結果は得られなかった。

自分が助けてもらったことへの恩返し、あるいは社会への恩返しといった動機が、ボランティア活動に従事するきっかけとなることが報告されている（小澤，1998など）。またボランティア活動に積極的な人が「相手の笑顔がうれしい」「自分の喜びになる」というボランティアイメージを持っていることも報告されている（倉掛・大谷，2004）。今回の大学生のボランティア活動の動機の推測においても、このような理由が抽出されたのは非常に興味深い。動機を測定する尺度を用いたこれまでの質問紙研究では注目されてこなかったが、これは使用されている尺度がアメリカの尺度を翻訳して用いていることによるからかもしれない。

お世話になったことへの恩返しや「周りの人の喜ぶ顔が見たい」という動機は、他者志向的達成動機において語られる内容と同じである（伊藤，2006）。研究1では明らかにならなかったが、ボランティア活動に対する利他的ないし互恵的動機の認知と他者志向的動機に対する肯定的態度の関係について、さらに検討していく必要があると考えられる。

研究2

目的

研究1では、自由記述によってボランティア活動の動機（理由）の認知の仕方の個人差を捉えようとした。研究2では、ボランティア活動の動機を尋ねる質問紙尺度を使い、この下位尺度と動機態度尺度の相関を調べることにより、両者の関係を検討する。

方法

研究参加者 ボランティア活動に関する授業を受講している大学生 164 名（内訳は 2011 年 62 名、2012 年 102 名で、調査を行った 2 週の授業のうちいずれかの質問紙調査に回答した人数である）。

手続き 2011 年 10 月 31 日から 11 月 16 日、および 2012 年 6 月 5 日から 2012 年 6 月 19 日まで著者が行った 3 週にわたる授業の一部を用いて調査を実施した。

第 2 週の授業の冒頭に Clary et al. (1998) が作成した Volunteer Functions Inventory (VFI) の翻訳版（坂野ら、2002）30 項目を、「はい」、「どちらともいえない」、「いいえ」の 3 件法で回答させた。VFI は (1) 感情的安寧、(2) 利他主義、(3) 職業上の成功、(4) 社会的つながり、(5) 知識の獲得、(6) 自尊心の高揚、の 6 つの下位尺度（各 5 項目ずつ）を構成する。教示文は、「ボランティアおよびあなた自身のことについてあてはまる場所に○をつけなさい」である。また同時にこれまでのボランティア経験について、「現在定期的に活動」、「不定期に活動」、「過去に活動していたが今はしていない」、「これまでやったことがない」、の 4 つのなかから回答させた。

動機態度尺度は、2011 年では VFI 実施後の第 3 週に、2012 年ではその前の第 1 週に実施した。研究 1 と同様に 6 件法で回答させた。今回はいずれも誕生日と携帯電話番号の下 4 桁を記入させるというやり方で 2 つの質問紙のマッチングを行ったため、研究 1 と異なり無記名であった。

結果

VFI の分析 坂野ら（2002）に従い下位尺度得点を算出し、ボランティア経験の有無（現在経験、過去経験、経験なし）で比較するため、分散分析を行った（表 5）。「社会的つながり」の得点で主効果が認められ ($F(2, 120) = 10.79, p < .01$)、現在ボランティアしている人で最も高く、経験なしの人が最も低かった。ただしこのなかには自分の友人がボランティア活動を行っているかどうかを尋ねる項目などが含まれており、現在ボラ

表5 ボランティア経験ごとの VFI 下位尺度得点

	安寧	利他	職業	社会	知識	自尊
現在経験 (17名)	4.7 1.9	7.5 1.4	7.3 2.0	6.3 2.1	8.5 1.7	7.1 2.2
過去経験 (62名)	3.5 2.0	7.7 1.7	7.2 1.5	5.1 2.5	8.6 1.3	7.3 1.9
経験なし (44名)	3.7 2.1	7.5 1.7	6.9 1.8	3.5 2.4	8.7 1.6	7.2 2.1

上が平均値、下が標準偏差

ンティア活動を行っている人がそのなかで友人関係を形成しているならば当然の結果と解釈できるかもしれない。また「心理的安寧」の得点でも有意には至らなかったものの ($F(2, 120) = 2.23, p = .11$)、やはり現在ボランティアをしている人で最も高かった。それ以外では3群に差異は認められなかった。ただし各下位尺度のアルファ係数を求めると、最も低い「利他主義」で .39、「職業上の成功」で .44 であり、それ以外の4つの下位尺度も .60～.65 で、決して高い値ではなかった。

そこで探索的に最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。5因子解を採用し解釈したところ、第1因子は「ボランティア活動によって、ものごとについての新たな考えが得られる」に最も負荷量が高く、「知識の習得」と重なるところが多かった。第2因子は「ボランティア活動は、自分が選んだ職業で成功することに役立つ」に最も負荷量が高く、「職業上の成功」と項目が重なっていた。第3因子は「親しい人の中に、地域での助け合いをととても大切にしている人がいる」に最も負荷量が高く、「社会的つながり」の項目がすべて含まれていた。第4因子は「ボランティア活動は、自分が好ましい人間であることを感じさせてくれる」に最も負荷量が高く、「自尊心の高揚」と内容的に重なっていた。第5因子は「ボランティア活動をすることで、あまりさみしさを感じないですむ」他1項目のみ負荷量が高く、いずれも「感情的安寧」の項目であった。「利他主義」の項目は1項目を除いて、各因子への負荷量が低く削除された。

VFI と自己・他者志向的達成動機への態度の相関 研究 1 と同様に動機態度尺度の下位尺度得点を算出し（表 2）、VFI との相関を検討した。坂野ら（2002）の下位尺度で .20 以上の相関が認められたのは、利他主義と自己志向（-.21）および他者志向（.29）、知識の習得と還元（-.22）および統合（.26）のみであった。一方、探索的因子分析による下位尺度では、知識の習得と還元（-.21）および統合（.30）、自尊心の高揚と統合（.22）に相関が認められたが、他に .20 以上の相関は認められなかった。

考察

利他主義と他者志向的動機に対する肯定的な態度の間に正の相関が認められたことは仮説と一致する。しかし利他主義の項目の内容を確認すると、「ボランティア活動が利他的な動機に基づいている」と考えているか否かではなく、回答者自身が利他的な態度を保持しているかどうかを尋ねている。よってこの結果は自分自身を利他的と捉えている人が、「他者のため」と考えて達成行動に従事することに肯定的な態度を持っていると解釈される。

また知識の習得と統合の間に正の相関が認められたことも仮説と一致する。ボランティア活動の動機として様々な実利的な動機を推測するほど、自己志向的動機と他者志向的動機を対立させず、統合させて捉えていることが明らかにされた。一方、ボランティア活動への利己的な動機の推測（自尊心の高揚や感情的安寧）と自己志向的動機への肯定的な態度の間には相関が認められなかった。全体として今回の結果は仮説の一部を支持したと言える。

研究 3

目的

研究 1 と 2 では一般的なボランティア活動に対する動機の認知を参加者に尋ねた。研究 3 では具体的なボランティア活動の事例を提示し、その活

動とボランティア個人に対する印象と自己・他者志向的達成動機への態度の関連を調べる。

取り上げたのは、仕事で自分が設けた基準を達成することにある一定額を寄付している営業マンの事例である。このような寄付の仕方は多くのスポーツ選手が実際に行っている（伊藤，2010）。この寄付では、「他者のため」の寄付行為と「自分のため」の達成行動を結びつけており、その意味で達成行動における自己志向的動機と他者志向的動機の統合と類似した状況である。実際に行っているスポーツ選手も、自分のモチベーションが高められることを語っている。その一方で寄付額が不安定であったり、一種の売名行為を受け取られかねないという否定的な側面もあり、一般的なボランティア活動よりも、利己的な動機を推測しやすい事例と考えられる。このような理由から、本研究では同様の寄付行為を行っている営業マンの事例を紹介した新聞記事を用いることとする。

方法

研究参加者 研究1と研究2に参加した大学生。

手続き 第3週目の授業の冒頭で、2010年1月14日の読売新聞の記事「幸せのシェア（10） 寄付 自分でルール設定」のコピーを配布し、著者がその記事を読み上げた。記事は、10枚の名刺を交換するごとに20円を寄付し、世界の子どもにワクチンを贈るというルールを自分で決めて実践している営業マンのことを紹介している。名刺にはこの活動を知らせるマークを入れ、このルールが社内だけでなく取引先にも広がっていると記され、「喜びを感じる行為のたびに寄付をするので、自分も相手も幸せになれるのが特徴だ」と結んでいる。その後、この営業マンの活動について、自分の考えや思うところを自由に記述するように求めた。2010年の調査では、事前に学籍番号と氏名を記入させ、この記述を授業のレポートとして回収することを教示した。2011年と2012年の調査では、先に行った調査とマッチングできるように誕生日と携帯電話番号下4桁を記入させる形で匿名状況で実施した。また2011年の調査では、動機態度尺度と同じ

質問紙内に組み込んで回答させた。

結果

記述内容 全体として肯定的に捉える見方が大半を占めていた。その内容としては、寄付が20円という少ない金額のため始められやすくまた継続しやすいこと、活動している本人の営業に対するモチベーションが高められること、周囲の人に影響を与えてボランティアを広げていること、が指摘されていた。また「一石二鳥」や「win-win」といった表現で自分と他者の双方の利益につながる活動であることを肯定的に評価する記述も多々見られた。

否定的な記述としては、寄付の仕方について、「寄付金額が少なすぎる」、「会社の宣伝になっている」、「毎回決まった額を寄付する方が合理的である」、といった指摘がなされた。特にその動機に関連して、「自己満足のように思える」、「辛いこと（仕事）に対して自分を慰めるための寄付」、「人を助けたいという思いからやっているのか疑問」、「自分が良い人間であることをアピールしたいように見える」など、動機の利己的側面を指摘した記述がなされていた。その一方でこの点を積極的に評価する記述もごく少数ではあるがなされた。例えば、「自分のためであることを認めて相手のためと思わないことで謙虚になれる」、「募金は偽善という意識があったが人間らしい募金は推奨すべき」、「これなら偽善者という認識は生まれない」、「偽善や後ろめたい気持ちが生じず潔い」、といった記述が認められた。また、「なぜ毎回決まった額を寄付していくということではいけないのか」といった疑問や、「自分の仕事と寄付を無理矢理結びつけており必然性がない」、といった寄付の仕方そのものに対する疑問も挙げられた。

寄付行為に対する評価と自己・他者志向的達成動機への態度の関連 記述内容を今回の寄付行為と営業マンに対する評価の肯定性に基づいて、(1) 非常に肯定的、(2) 肯定的、(3) 肯定的な内容と否定的な内容が混在、(4) 否定的、の4つに分類した。分類は筆者一人で行った。特に「非常に肯定的」と「肯定的」の区別は、「とても」「非常に」といった強調語の使

用や、ボランティア自体に対する評価にとどまっているか、それとも自己と他者の双方の利益が強調されたりボランティア個人に及ぼす肯定的な影響を評価しているかどうかに基づいた。全体の記述数は表6の通りである。「否定的」に分類された記述数が少なかったため、分析においては(3)と(4)を合わせて否定群とし、(1)に対応する肯定強調群、(2)に対応する肯定群と3つの群間で動機態度尺度得点を比較した。

表6 記事のボランティア活動に対する評価

	非常に 肯定的	肯定的	混在	否定的	計
2010年参加者	23	41	19	9	92
2011年参加者	14	25	11	3	53
2012年参加者	24	35	13	4	76
計	61	101	43	16	221

調査実施状況が異なるため、各年度ごとに動機態度尺度の下位尺度得点に対して1要因3水準の分散分析を行った。研究1の2010年の研究参加者では、他者志向において主効果が有意であり($F(2, 88) = 2.97, p < .10$)、寄付行為に対する評価が肯定的であるほど他者志向的動機に対して肯定的であった。また有意には至らなかったが、寄付行為に対する評価が肯定的であるほど統合の得点が高かった($F(2, 89) = 1.90, p = .16$)。

これに対して研究2の2011年の調査の参加者では、有意な主効果は認められなかった。また2012年の調査の参加者を対象にした分析では、自己志向($F(2, 58) = 2.39, p = .10$)と還元($F(2, 60) = 2.34, p = .10$)で有意に近かった。肯定強調群は自己志向の得点が高く、否定群で還元の得点が低かった(表7)。

否定的な記述内容の再検討 研究1のデータに基づく分散分析と研究2のデータに基づく分散分析の結果が一貫していない理由として、否定的な評価の記述と分類された内容の性質が異なっていた可能性が考えられる。同じ否定的な評価でも、他者の要求に敏感な立場からすれば、寄付を達成

表7 ボランティア活動の認知と自己・他者志向的達成動機づけへの態度

		自己志向	他者志向	他者否定	還元	統合
2010年 参加者	肯定強調群	18.0	17.8	21.3	20.5	24.7
		3.7	4.0	3.9	4.5	4.0
	肯定群	18.7	16.4	20.8	21.0	23.4
		4.2	4.2	3.8	5.0	3.1
	否定群	19.3	15.1	20.3	22.0	23.0
		4.4	4.8	3.6	4.8	2.6
2012年 参加者	肯定強調群	19.2	16.6	18.5	20.5	22.8
		4.7	4.0	5.0	2.2	2.5
	肯定群	16.9	16.8	2.0	20.1	23.9
		4.4	4.2	2.0	3.8	3.1
	否定群	16.3	17.7	18.0	18.0	24.2
		3.2	3.3	5.9	4.3	3.1

上が平均値、下が標準偏差

に結びつける必然性やそれに伴う寄付額の不安定性に注目し、直接に寄付する方が合理的であるといった否定的な評価を下すことが予想される。一方、行為者の利己的動機に敏感な立場からすれば、このようなボランティア活動の背後にある利己的動機に注目し、行為者の活動を独善的であるとか自己満足と捉えることが予想される。

そこですべての研究参加者の否定的な記述内容のなかから、「直接寄付した方がよい」といった寄付の実効性についての批判（13名）と「自己満足に感じる」といった行為者の動機や意図についての批判（14名）を抽出し、それぞれに評価した参加者の動機態度尺度得点を比較した。*t*検定を行ったところ、動機や意図についての批判をした者は実効性についての批判をした者よりも、自己志向の得点が高く（ $M=22.1$ vs. 16.9 ; $t(25) = -2.97, p < .01$ ）、他者志向の得点が低かった（ $M=13.8$ vs. 17.5 ; $t(25) = 1.91, p < .10$ ）。表2の参加者全体の自己志向と他者志向の平均値と比較しても、そのような傾向が認められた。

考察

本研究では、自分自身の達成行動とボランティア活動の双方を結びつけて、「自分のため」と「他者のため」を統合させる実践を行っている人物に対する評価を通して、自己・他者志向的達成動機への態度とボランティア活動の動機に対する推測との関連を調べた。

他者志向的達成動機の採用は、本来「自分のため」になされる達成行動を他者の期待に応えたり他者を喜ばせる行動として捉えて、自分を動機づけているという点で、本研究で紹介した事例と共通するところがある。このため、他者志向的達成動機に対して肯定的な態度を保持している人や自己志向的達成動機と他者志向的達成動機を統合させて関係づけている人でこの事例に対する評価が肯定的であると予想される。

しかし一方で自己志向的達成動機に対して肯定的な態度を保持している人にとっては、ボランティア活動を純粋に「他者のため」と捉えず、自己利益と結びつけて自分が良い成績を上げたときに寄付をするというやり方を肯定的に捉えるということも予想される。ボランティア経験者ほどボランティア活動が自分に与える影響の大きさに気づいており、ボランティア活動を「自分のため」に行っているという意識を持ちやすいことが指摘されている。このような意識は、ボランティア個人がボランティア活動に対して「やってあげている」という意識を薄めて、活動の継続に寄与していることも考えられる。現に今回の記述にも、「謙虚になれる」、「偽善という意識が生まれにくい」という評価が含まれていた。

研究参加者は概ねこの活動と人物を肯定的に評価していた。評価の肯定性と自己・他者志向的達成動機への態度の関連を調べたところ、一貫した結果は得られなかった。これは先述したとおり、自己志向的動機に肯定的な人も他者志向的動機に肯定的な人も、異なる観点からこの活動を肯定的ないし否定的に捉えることが可能であるためと推察される。評価の観点が異なっていることが予想されたため、否定的な評価記述の内容を再分類し、自己・他者志向的動機への態度との関連を見たところ、この活動について

利己的な動機の側面（「自己満足を得る」、「自分高揚的アピール」、「自分を奮い立たせるための手段」など）から否定的な記述をした人は、自己志向的動機に肯定的、他者志向的動機に否定的であった。また、このような活動の必然性を認めず、「ルールなど必要なく普通に寄付すればいい」というように、行為の実効性そのものを疑問視する記述をした人は、他者志向的動機に肯定的で、自己志向的動機に否定的であった。この結果は仮説を支持する結果と捉えることができる。

まとめ

3つの研究を通して、最初に挙げた3つの仮説（予想）は部分的に支持された。自己志向的達成動機に肯定的な態度を保持している人は、ボランティアの動機についても利己的な動機を認知、推測しやすいという結果が得られた。また他者志向的動機に肯定的な人は、ボランティア活動に対しても他者の立場から捉え、利他的な動機を保持している可能性が示唆された。

この他に、互惠性に基づく動機が達成行動とボランティア活動の双方に認められたこと、ボランティア活動をめぐる「自分のため」と「困っている人のため」という意識の葛藤が確認されたことは重要な結果と考えられる。「自己」と「他者」の心理的統合過程について、2つの行動の動機の共通点からさらにアプローチしていく必要があると考えられる。

引用文献

- Clary, E.G., Snyder, M., Ridge, R.D., Copeland, J., Stukas, A.A., Haugen, J., & Miene, P. (1998). Understanding and assessing the motivations of Volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1516–1530.
- 伊藤忠弘 (2004). 達成行動における「他者志向的動機」の役割 帝京大学心理学紀要, 8, 63–81.

- 伊藤忠弘 (2006). 「最も努力した経験」における他者志向的動機の現れ方 帝京大学心理学紀要, 10, 27-44.
- 伊藤忠弘 (2010). 達成動機づけにおける「個人」と「社会」の調整と統合—アスリートのボランティア事例に基づいて— 学習院大学文学部研究年報, 56, 181-205.
- 伊藤忠弘 (2011). ボランティア活動の動機の検討 学習院大学文学部研究年報, 58, 35-55.
- 伊藤忠弘・上淵寿・大家まゆみ・藤井勉 (2012). 大学生の対人関係と動機づけ (1) —他者志向的達成動機づけの規定因— 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集, 671.
- 鹿毛雅治 (2012). 好きこそものの上手なれ—内発的動機づけ— 鹿毛雅治 (編) モチベーションをまなぶ 12 の理論 金剛出版
- 倉掛比呂美・大谷直史 (2004). 大学生にとってのボランティア活動の意味 鳥取大学教育地域科学部紀要・人文科学, 5, 209-227.
- 小澤千穂子 (1998). 有償ボランティアの参加動機と活動継続意志の維持要因・阻害要因—世田谷ふれあい後者協力員へのケーススタディによる検討— 大妻女子大学紀要家政系, 34, 221-237.
- 坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫 (2002). 大学生における Volunteer Function Inventory の交差妥当性の検討 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 9, 24-31.